

春の交流会（初日）

中野区 小田切松枝（北城町出身）

春になると、物の芽が膨らみ、子供達もひと回り身体が大きく元気になる感じがします。桜前線日本列島北上の中、ふるさとの桜の下、Jネット春の交流会が、四月十一日（日）から十三日（火）まで、地元会員と合せ三十九名の参加をいたたきお互いの交流を深めました。

初日の十一日は、あいにくの雨模様の中、本城町の「なかしま食堂」に二時集合、会には村山秀幸市長も出席され、「ふるさと上越へお帰りなさい」とあたたかな挨拶をいただき大変感激いたしました。マジックショウを見ながらふるさとの味を食し交流を深めました。が、あまりの寒さにびびりました。

ふるさとの桜の下に酒酌まを

越後路の花のはるかに妙高山



四時にバス出発

「米と酒の謎蔵」を見学、「清酒の表示」日本酒度」「吟醸・大吟醸」「日本酒のカクテル」「酒作りの道具」「純米酒」「生酒」「生（き）醗（もと）山（やま）麴（はい）速（そく）醸（じょう）」「本醸・普通酒」といろいろ説明書きありましたが、一番気に入った説明は、「日本酒と肴」日本酒は基本的には大体の食材と反発しません。醤油、味噌などの調味料と日

本酒は特に合うようです。

次に素敵と思ったのが、「折紙カレンダー」折紙で表現した一年の田仕事カレンダーです。

「酒のみカレンダー」

美しい日本語に「ころが和らぎ暖かな気分」にさせられました。

一月から十二月まで、屠蘇、雪見酒、白酒、花見酒、菖蒲酒、夏越の酒、七夕酒、涼み酒、月見酒、紅葉酒、祝酒、冬至酒、まさに、私達は今年花見酒が少し残っているようですね。

酒蔵をあとに、今晚の宿、米本陣へと車を走らせました。

川底の石を晒して雪解水



四月十二日（月）雨

花冷えの頰城平の朝茶かな

八時三十分米本陣出発

牧歴史資料館

宮口古墳出土品や、牧区に残る貴重な民族資料を後世に伝えるために一九八三年に開館しました。宮口古墳群も近くにありますが、雨のため見学は中止です。ここを整備するにあたり、土地所有者の農民の方々の心の動きがあり、解決するまでには紆余曲折があったと説明されました。今は市内の小学生の格好な遠足の



場所であるとのこと。特に新緑の頃、一面に緑の絨毯となり、古墳の上から滑り下るのが、子供達は大好きなのだそう。子供達が、嬉々として古墳と戯れる声と姿が目につかぶようです。

ここには仏像が安置されており、幾度の戦禍を逃れ、村人達に守られここに在す仏像に掌を合わせました。さぞかし安堵され在すことと思います。

ガイドは久米満さん、中学のクラスメートで五年ぶりの再会です。

里人の秘中の秘仏花の寺

花は葉に包われば遠くをるばかり



清里歴史民族資料館

六千年前、この台地に人々が住み、石で道具を作り、土器を焼き、魚や動物、野山の草木の実をとって生活していた先人達の残してくれた文化を大切に、後世に伝えたいと考えています。と館内を案内して下さった方のメッセージです。

燃える水・石油

明治時代、清里を中心とした地域では、頸城油田で最多の石油を産出し、日本で最初のパイプラインにより送油されました。

檜池の隕石

大正九年九月十六日、晴れた日、夕刻六時頃、南方より北方に「ゴオン」という音に村人達はおどろき戸外に出、空を見上げたが何も見えず、ただ一條の光だけでした。小学校の先生が隕石で星の落下したものと断定されました。落下地点、清里区上中條五八四、全重量四・四二kg「宇宙からのメッセージ」として大切に保管されております。

隕石とお別れして、次の見学は岩の原葡萄園です。

とぎれては狭く集落本の芽雨



岩の原葡萄園・貯蔵庫の中へ

ワインは樽に入れ、熟成することにより、渋みが弱まり、ぶどう本来の持つアラマ（果実香）とブーケ（熟成香）が加わりすばらしい芳醇さと、まろやかさが発揮します。

「どの位の場所に寝かせておくか？」
「この樽で、ビン詰にするとどの位の数か？」

「樽は国産か輸入品か？」等々の質問に社員の方が一つ一つ丁寧に答え下さいました。雪室も見学させていただきました。オー寒い寒い、全員ブル、ブル、ほんのわずかな時間で退散です。古くて新しい雪の利用です。入口近くに応用微生物学者・坂口謹一郎氏の歌碑があります。頸城区に坂口記念館があり、博士の遺品や業績の紹介、酒造道具の展示のほか藏人の話を聞きながら試飲もできるそうです。

私は川上善兵衛が全財産を投げうってぶどう産業を興した位の知識しかありませんでした。展示室の見学は確り時間をかけてと思ったのですが、限られた時間内での私のレポートです。大地主の子として育ちながら小作人との生活の差に気づき、小作人をうるおそうと思ったのが切っ掛けでした。親戚にあたる人の塾に入門します。そこは春日村にあり全寮制です。いっしょに暮らす同級生はほとんど小作人の子供でした。この時に自分の生活は小作人の犠牲によってなりたっている実感するので。昔から越後には「三年一作」という言葉が伝えられてきました。そして折角とれた米も味が非常に悪く「鳥またぎ米」などといわれまし

た。善兵衛はこうした頸城平野の地主の家に生まれました。しかし善兵衛は普通の地主とは違っていました。彼は小作人に同情し、なんとかして小作人の暮らしをよくする方向はないものかと考え、そしてこれまで米より外のものとは作られることもなかった土地の一角にぶどう園を開きぶどう酒の産業を興しました。この産業の計画は、不幸なことに、結果的には失敗に終わり、先祖代々受けつがれて来た川上家の莫大な財産は失われてしまいました。しかし善兵衛の行った、ぶどうに関する数々の研究は、専門の学者達をびつくりさせ、彼の生み出した多くの新品種は、ぶどうの本場である山梨県をはじめ各地に広まり、その後の日本ぶどう栽培を大きく発達させたのでした。越後の米ですが、稲作は不安定で味も悪かった米を、農事試験場で善兵衛がぶどうについて行ったと同じようにメンデルの法則をつかって品種改良をはかったのです。とうとう越後平野によく育つ、しかもおいしい稲を生み出すことができました。そして越後は一躍にして、名実ともに「日本の米どころ」といわれるようになりました。善兵衛は事業家としては失敗しましたが、科学者としてはみごとに成功したのでした。



岩の原葡萄園資料館にて

善兵衛さんの苦勞が凝縮されているワインを試飲し昼食会場へ、途中に川上善兵衛住居跡の碑が春雨の中、ひっそりありました。昨今のワインブーム、特に女性に人気がありますが泉下の善兵衛さん、どんな顔してどんな思いで現世をみていらつしやるのでしょうか？

本日の昼食はバイキングです。雨模様の中、少々寒いという感じはしたのですが、おなががいっぱいになると、身体が暖かくなるようですね。地元産の春野菜美味でした。

十二時三十分岩の原葡萄園出発

里訛やさしくつむ花の跡
一粒のチヨコのうまさや花産れ

一時 直江津駅着 解散

自然を肌で感じ、土地の人の温もりに触れ、歴史と文化を知る。その土地の懐に深く分け入れれば、ふるさととはこんなに面白い、そして楽しく暖かい。

さよならは次への一步の花吹雪く
ふるさとや花また花ののす



マジックショー



交流会参加者全員で



「なかしま食堂」での交流会

春の交流会（二日目）

三重委員会

岡田昌孝（妙高市出身）

私は上越ネットには昨年入会させて頂きました。催し物には名古屋と大阪のサロンに参加したばかりで、交流会へは今回初めて後泊コース（十三日泊）に参加しました。

信越線の黒姫駅を過ぎた頃から残雪が多くなり、県境を流れる関川が見える妙高では、今年の豪雪を思わせるように、田んぼの中まで雪が残っておりました。それでも線路わきの日当たりの良い土手には、蒔の藁がみられ雪国の春を感じる事ができました。

上越火力発電所

この発電所は、太田前会長のご尽力で東北電力（株）と中部電力（株）が共同で開発に着手しました。現在では中部電力（株）が一ノ号系列（二一九万kw×2）の建設を進めているところでし

た。（三号系列は将来東北電力（株）が建設する予定）

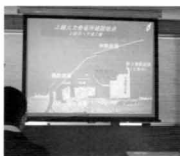
今回の見学は和久井会長が前会長に話を出され実現したと伺いました。

建設事務所で上越火力建設所の伴所長さんから、スライドを見ながら発電所設備の概要を説明して頂き、その後建設現場をバスで一巡しながら（要所ではバスを降りて）説明して頂きました。

この発電所の燃料は、天然ガスをマインナス（一六二℃で液化したLNG（液化天然ガス））です。液化により体積が1/600となり、輸送と貯蔵が容易となり、また、液化時に不純物が取り除かれるので、燃焼時には硫黄酸化物やばい煙が出ないうえ、二酸化炭素の排出量も石油・石炭より少なくなるとのことでした。また、ガスタービンと蒸気タービンとを組み合わせた「コンバインド発電方式」を

採用することにより発電効率が良くなり、燃料の節約（ひいてはCO2の削減）に寄与することでした。

建設現場では、平成二十四年七月運転開始を目指し、現在一日一、二〇〇名程の作業員が工事に従事し最盛期を迎えておりました。外槽工事中のLNGタンクの中に入りましたが、中は直径八〇mと広々としており、めつたに見られない場所を見せて頂きました。また、LNG積槽は三〇〇mのLNG船が係留できるもので、将来はサハリンからの船の着桟も想定されることでした。積槽では全員がライフジャケットを着用しましたが、ヘルメットと併せて、見学者一同慣れない保護具の着用に戸惑いながらも、安全に配慮して施工されていることを強く感じました。さらに、ガスタービンが設置されているところや、人が悠々立つことができる寸法のキャタピラを有する七五〇トンの巨大なクレーンなど、珍しいものも見せて頂き見学を終了しました。



よしかわ杜氏の郷

「酒米五百万石の特産地」、「杜氏の酒づくり技術」、「全国唯一の高校醸造科を有する町」を三本柱に設立されたことなどの説明を受けた後に、酒造りの設備を見学しました。通路に展示された法被から、私の住んでいる東海地区にも、大勢の杜氏さんが来られていることを知りました。売店には大吟醸から精米歩合九〇%まで多くの酒があり、色々と試飲させて頂きました。



試飲コーナー

宿舎 マリンホテルハマナス

柿崎上下浜温泉のマリンホテルハマナスは、第二セクター経営で、日本海に沈む夕日を楽しむことが出来るホテルですが、生憎と夕日は雲の中でした。

四階の展望風呂で日本海を眺めながら汗を流し、さっぱりしたところで宴会です。越後料理とお酒、カラオケで楽しく過ごしました。私が妙高高原の杉野沢出身と話したら、女学校時代同級だった杉野沢出身の生徒の名を知っているかと問われました。それが父の妹の長女だったことや、杉野沢出身の山川先生のことを聞かれたりなど、人の繋がりが本当に身近にあることにびっくりしました。



楽しい宴会スナップ

前島記念館

翌日は晴れて暖かくなり、ホテルから南に真白な妙高・火打ちの山々が、東には霊峰米山がくつきりと見え、絶好の行楽日和となりました。

「前島記念館」を訪ねました。

案内は、文化講演会で、前島密の業績についてお話下さった元館長の樋口嘉和さんでした。この講演が縁で会員になって頂きました。懐かしい再会でした。館内には郵便関係を始めとする、種々の資料や記念品、写真等が展示されています。前島密は郵便の父というイメージでしたが、その業績は、海運、新聞、電信、電話、鉄道等々多岐に渡っており、改めて先人の偉業に感服させられました。



樋口さんの説明

高田城址の桜

岩間さんのお店の前を通り、お堀端の満開の桜を楽しみました。

私の住んでいる桑名市は上越地区と何かと繋がりがありません。伊勢桑名藩の三代藩主松平定重が、越後高田藩主に移封されており、ここに赴任した渡辺藩の飛び地があり、ここに赴任した渡辺藩の助が書き残した「柏崎日記」が有名になりました。戊辰戦争の鳥羽・伏見の戦いで敗れた京都所司代の桑名藩主松平定敬は、百人ほどの藩士と柏崎に来て願勝寺にて謹慎していましたが、ここに宇都宮などで官軍と戦った桑名藩士が合流し、鯨波・長岡における北越戦争へと転進しております。



やっと花見ができました

「朝市・駅前ホテルハイマート」

直江津の「三・八市」では、コゴミ、蕨の羹、板取りなど、懐かしい早春の山菜が多く見られました。雪解け水で茶色に濁った関川河口の「安寿と厨子王の供養塔」を回り、昼食に向かいました。駅前のホテルハイマートにて、駅弁甲子園（新宿京王百貨店の「元祖有名駅弁と全国うまいもの大会」の通称）で優勝した弁当「鱈めし」と、おつまみのスルメの天ぷら「する天」を美味しく頂いて、今回の交流会はお開きとなりました。



安寿と厨子王の供養塔

交流会に初めて参加するに当たり、知己がいらないことから若干の遠慮がありました。参加の皆様が温かく迎えてくれたうえ、何かにつけて親切にして頂いたので、楽しく過ごすことが出来ました。また、思わぬ地縁の繋がりがなども教えて頂き、お陰様で実りの多い旅となりましたことを、参加の皆様には厚くお礼申し上げます。



タンク全容

